

講談社文芸文庫 編
kōdansha bungeibunko

富岡幸一郎 選

妻を
失う

離別作品集

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko



妻を失う
離別作品集

kōdansha bungeibunko

講談社文芸文庫 編

富岡幸一郎 選

講談社  文芸文庫

つま うれな
妻を失う 離別作品集

こうだんしゃぶんげいぶんこ へん
講談社文芸文庫 編

二〇一四年一月一〇日第一刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2・12・21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395・3513

販売部 (03) 5395・5817

業務部 (03) 5395・3615

デザイン 菊地信義

印刷 豊国印刷株式会社

製本 株式会社国宝社

本文データ制作 講談社デジタル製作部

©Kodansha Bungeibunko 2014. Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



ISBN978-4-06-290248-9

目次

元素智恵子

高村光太郎

七

裸形

高村光太郎

九

智恵子の半生

高村光太郎

一一

小さき者へ

有島武郎

三三

出しようのない手紙

葉山嘉樹

五〇

春は馬車に乗って

横光利一

五九

死のなかの風景

原民喜

八〇

朝の悲しみ

清岡卓行

九七

にきび

三浦哲郎

一五四

悲しいだけ

藤枝静男

一六五

妻と私

江藤淳

一八〇

解説

富岡幸一郎

二五三

著者紹介

二六八

妻を失う
離別作品集

kōdansha bungeibunko

講談社文芸文庫 編

富岡幸一郎 選

講談社



文芸文庫

目次

元素智恵子

高村光太郎

七

裸形

高村光太郎

九

智恵子の半生

高村光太郎

一一

小さき者へ

有島武郎

三三

出しようのない手紙

葉山嘉樹

五〇

春は馬車に乗って

横光利一

五九

死のなかの風景

原民喜

八〇

朝の悲しみ

清岡卓行

九七

にきび

三浦哲郎

一五四

悲しいだけ

藤枝静男

一六五

妻と私

江藤淳

一八〇

解説

富岡幸一郎

二五三

著者紹介

二六八

妻を失う 離別作品集

元素智恵子

高村光太郎

智恵子はすでに元素にかえった。

わたくしは心霊独存の理を信じない。

智恵子はしかも実存する。

智恵子はわたくしの肉に居る。

智恵子はわたくしに密着し、

わたくしの細胞に燐火を燃やし、

わたくしと戯れ、

わたくしをたたき、

わたくしを老いぼれの餌食にさせない。

精神とは肉体の別の名だ。

わたくしの肉に居る智恵子は、

そのままわたくしの精神の極北。

智恵子はこよなき審判者であり、

うちに智恵子の睡る時わたくしは過ち、

耳に智恵子の声をきく時わたくしは正しい。

智恵子はただ嬉々^{きき}としてとびはね、

わたくしの全存在をかけめぐる。

元素智恵子は今でもなお

わたくしの肉に居てわたくしに笑う。

裸形

高村光太郎

智恵子の裸形をわたくしは恋う。

つつましくて満ちていて

星宿のように森厳で

山脈のように波うつて

いつでもうすいミストがかかり、

その造型の瑪瑙^{めのう}質に

奥の知れないつやがあつた。

智恵子の裸形の背中の小さな黒子まで

わたくしは意味ふかくおぼえていて、

今も記憶の歳月にみがかれた

その全存在が明滅する。

わたくしの手でもう一度、

あの造型を生むことは

自然の定めた約束であり、

そのためにわたくしに肉類が与えられ、

そのためにわたくしに畑の野菜が与えられ、

米と小麦と牛酪^{バター}とがゆるされる。

智恵子の裸形をこの世にのこして

わたくしはやがて天然の素中^{そちゆう}に帰ろう。

智恵子の半生

高村光太郎

妻智恵子が南品川ゼームス坂病院の十五号室で精神分裂症患者として粟粒性肺結核で死んでから旬日で満二年になる。私はこの世で智恵子にめぐりあったため、彼女の純愛によって清浄にされ、以前の廢頹生活から救い出される事が出来た経歴を持って居り、私の精神は一にかかって彼女の存在そのものの上にあつたので、智恵子の死による精神的打撃は実に烈しく、一時は自己の芸術的製作さえ其の目標を失つたような空虚感にとりつかれた幾箇月かを過した。彼女の生前、私は自分の製作した彫刻を何人よりもさきに彼女に見せた。一日の製作の終りにも其を彼女と一緒に検討する事が此上もない喜であつた。又彼女はそれを全幅的に受け入れ、理解し、熱愛した。私の作った木彫小品を彼女は懷に入れて街を歩いてまで愛撫した。彼女の居ないこの世で誰が私の彫刻をそのように子供のように入け入れてくれるであろうか。もう見せる人も居やしないという思が私を幾箇月間か悩ま

した。美に関する製作は公式の理念や、壮大な民族意識というようなものだけでは決して生れない。そういうものは或は製作の主題となり、或はその動機となる事はあっても、その製作が心の底から生れ出て、生きた血を持つに至るには、必ずそこに大きな愛のやりとりが在る。それは神の愛である事であろう。大君の愛である事であろう。又実に一人の女性の底ぬけの純愛である事があるのである。自分の作ったものを熱愛の眼を以て見てくれる一人の人があるという意識ほど、美術家にとって力となるものはない。作りたいものを必ず作り上げる潜力となるものはない。製作の結果は或は万人の為のものともなることがある。けれども製作するものの心はその一人の人に見てもらいたいだけで既に一ぱいなのが常である。私はそういう人を妻の智恵子に持っていた。その智恵子が死んでしまった当座の空虚感はその故殆ど無の世界に等しかった。作りたいものは山ほどあつても作る気になれなかった。見てくれる熱愛の眼が此世にもう絶えて無い事を知っているからである。そういう幾箇月の苦闘の後、或る偶然の事から満月の夜に、智恵子はその個的存在を失う事によって却て私にとっては普遍的存在となつたのである事を痛感し、それ以来智恵子の息吹を常に身近かに感ずる事が出来、言わば彼女は私と偕ともにある者となり、私にとつての永遠なるものであるという実感の方が強くなった。私はそうして平静と心の健康とを取り戻し、仕事の張合がもう一度出て来た。一日の仕事を終つて製作を眺める時「どうだろう」といつて後ろをふりむけば智恵子はきつと其処に居る。彼女は何処にでも居るので